

現地（長崎市）露地ビワにおける灰斑病の薬剤耐性菌出現状況及び2種の炭疽病菌の発生頻度

[要約] 露地ビワの果実腐敗の主原因である灰斑病の現地（長崎市）におけるベンズイミダゾール系薬剤耐性菌の発生は17園中8園でみられ、検定した菌株の約4割が耐性菌株であった。また、炭疽病においてもベンズイミダゾール系薬剤が効果を示さない菌である *C.acutatum* によるものが大部分を占めていた。

長崎県果樹試験場・病害虫科

専門

作物病害

対象

果樹類

分類

指導

平成11年度長崎県果樹試験場業務報告

[背景・ねらい]

露地ビワ産地（品種：「茂木」）における果実腐敗の主原因である灰斑病菌について、主な使用薬剤のベンズイミダゾール系薬剤（トップジンMやベンレート）に対する薬剤耐性の出現状況を明らかにする。また、炭疽病には従来型の *C.gloeosporioides* と近年問題となっている *C.acutatum* の2種があるが、*C.acutatum* は、ベンズイミダゾール系薬剤に対して効果がないことが明らかになっているので、有効な防除対策の確立のために、これらの病原菌の発生頻度を調査する。

[成果の内容・特徴]

ベノミル100ppm以上で菌糸生育がみられたものを耐性菌とすると、現地（長崎市）露地ビワにおける灰斑病菌の耐性菌の発生は、17園中8園でみられ、検定した菌株の約4割が耐性菌株であった。また、耐性菌のうち約8割はベノミル1000ppmでも生育した（表1, 2）。

ベノミル100ppm以上の灰斑病耐性菌株菌に対して、ベルコート剤については、ほとんどの菌株が50ppmで菌糸の伸長を抑えた（表3）。

現地（長崎市）露地ビワにおける炭疽病菌は、ベンズイミダゾール系薬剤が効果を示さない菌である *C.acutatum* によるものが、大部分を占めていた（表4）。

[成果の活用面・留意点]

ビワ灰斑病及び炭疽病に対して、現在ベンズイミダゾール系薬剤が主体であるので防除体系の再検討が必要である。

[具体的デ - タ]

表 1 灰斑病菌のベノミルに対する耐性菌株の割合

検定圃場数	耐性菌発生圃場数	検定菌株数	μノミル100ppm以上の耐性菌株数	μノミル1000ppm以上の耐性菌株数	耐性菌株率 (%)
17	8	46	17	14	37.0

μノミル100ppm以上で菌糸生育がみられたものを耐性菌とした。

表 2 灰斑病菌のベノミルに対する耐性の程度別菌株数

検定菌株数	ベノミルに対する菌糸生育の最小阻止濃度 (ppm)						
	1	10	50	100	500	1000	1000 <
46	13	9	4	3	1	2	14

表 3 灰斑病菌のベノミル耐性菌に対するベルケート剤の濃度と菌糸生育阻止菌株数

検定菌株数	ベルケート剤の M I C (ppm)						
	1	5	10	50	100	500	1000
17	3	8	2	3	0	1	0

表 4 2 種の炭疽病菌の発生頻度

分離圃場数	分離菌株数	<i>C.acutatum</i>	<i>C.gloeosporioides</i>
14	51	14圃場50菌株	1圃場1菌株

[その他]

研究課題名：果実腐敗の発生要因の解明と効率的防除法の確立

予算区分：県単

研究期間：平成11年度（平11～15）

研究担当者：小嶺正敬，太田孝彦

既発表論文等：平成11年度果樹試験場業務報告